



『トクシマ・アンツアイガー』

第 19 号

徳島 1915 年 8 月 8 日

ルーマニア（2）

ハプスブルク家の支配下で暮らしているルーマニア人が、あらゆる点で自分たちの民族性を育むことが可能であったのに対して、ベッサラビアのルーマニア人は、今日もお力づくでロシア化されているのであり、またこれが進められてもいる。ベッサラビアにはルーマニア語を教える学校はひとつもなく、ルーマニア語の新聞もルーマニア語のミサもない。要するに、いっさいはルーマニア人を彼らの民族性から遠ざけるためにおこなわれているのである。それで、現在の世代とともに、ルーマニア文化とルーマニア語がベッサラビアから死に絶えるのではないかと危惧されている。

そういうわけで、この地ではルーマニアの民族性が現実には危機に瀕しているものであり、この危機は、ドニエプル川とプルート川のあいだの土地が、ルーマニアと再び統合されることによってのみ回避できるのである。

しかし他方、ハンガリーに住んでいるルーマニア人は、ベッサラビアのルーマニア人よりもはるかに多いし、さらには文化的にずっと高い水準にある。彼らは自分がルーマニア人であると感じており、ルーマニア人として教育されている。というのも、彼らはハンガリーでまったく自分たちの独自性のままに生活することをなおも許されているからである。彼らは自分たちの学校や教会、新聞などを持っているのだ。

それゆえ、人種的見地からみてより重要であると思われるのは、ルーマニア人が可能なかぎり早くベッサラビアを併合することである。国民経済的な面からみれば、問題になっているハンガリー領のいくつかの部分を獲得できるのではないかという見込みは、魅力的なものであるにちがいない。

しかしわれわれの感触では、結局これら二つの問題のいずれも決定的なものとはならないだろう。ルーマニアは、どちら側が勝利を得るかがはっきりするまで待っているのであり、敗北者を犠牲にして得られたなんらかの新たな領土を、勝利者からもらおうとするのであろう。

日本の歴史（17）

大名と武士の特権を廃したことは、日本の近代文化国家への発展における最も重要な一歩であった。これによってはじめて、ヨーロッパの技術的成果を目を見張るほどすばやく導入し、利用することが可能となった。1870年には司法改革と、裁判所の行政からの分離、電信機の導入がおこなわれた。翌年には長崎と上海がケーブルで結ばれ、ヨーロッパに倣って官営の郵便局が開設され、新しい貨幣のシステムが導入された。最初の鉄道は1872年に敷設され、同じ年には義務教育も実施された。一年後には国民皆兵制が施行され、キリスト教禁止令が解かれ、グレゴリオ暦と日曜の休業が取り入れられた。

これらさまざまな事柄の改革は、総じて民衆にとっては幸いであったが、

士族にとっては不利益しかもたらさなかった。彼らが学んでいたのは武器の扱い方ぐらいなもので、今やすべての特権を剥奪され、その能力も意欲もないというのに経済的競争への参加を強いられたと感じていた。彼らを外見上民衆から際立たせていた、二本の刀を差す権利すら、1871 年以降は失っていた。彼らに与えられた現金補償は、それまでの生活を続けてゆくにはまったく不十分だったので、彼らはしだいに貧しくならざるをえなかった。今や戦争だけが彼らの状況を改善する最も好都合な機会と思われた。このままでは、以前の状態を回復することは考えられなかったからである。士族たちは、朝鮮との戦争を煽る熱狂的な機運を盛り上げた。しかし、政府は戦争ができるほど強くはないと感じていて、結局は、数人の日本人商人が殺害された台湾への遠征軍の装備を整えただけだった。台湾の蛮族を屈服させることには成功したが、中国がこの占領に対して抗議した。唯一の成功は、中国がイギリスの仲介で日本に 50 万テールの賠償金を支払った (1874 年) ことである。この遠征は士族には何の得にもならず、彼らの境遇は改善されなかった。彼らは引き続き策動をおこない、彼らの憎悪的である政府組織を武力で除去しようともくろんだ。その最初の試みは 1876 年に熊本でなされた。その地の駐屯軍を不意打ちすることには成功したが、反乱軍はすぐに打ち負かされた。秋月と萩でも反乱が起こった。けれどもこれらは大した意味を持たなかった。これに対して、かつての陸軍大将西郷隆盛に率いられた反乱を鎮圧するには最大の努力を要した。1 万 2 千の軍が 1877 年 2 月に熊本に向かい、そこにいた政府軍の守備隊を打ち破ろうとした。要塞は果敢に抵抗した。この間に集められた政府軍が救援にやってきて、反乱軍を破った。彼らは攻囲を放棄せざるをえず、鹿児島に退却した。彼らはそこで 9 月に絶望的な戦いの後に打ち破られた。ほとんどの指導者は、事が破れたと知って自決した。反乱者の総数は約 4 万に達し、これに対して 5 万の政府軍部隊が出撃した。そのうち 7,000 名が戦死し、9500 名が負傷した。

つづく

攻囲された青島より（3）

それから私は跪いて、死にゆく息子のための祝福をおこなった。ドアのそばに傷から癒えつつある兵士が座っていた。彼はヴァルダーゼー高地で重傷を負ったのだが、このときは当直をしていたのだ。この勇敢な若者の頬にはずっと涙が光っていた。傍らのベッドでは、美しく繊細な顔をした若い兵士が低い声で呻いていた。彼は私のゲルハルトとともに運び込まれたのである。榴弾の破片が彼の背中に深く食い込んでいた。――

それから愛する息子は静かに、そして穏やかに死んでいった。私は彼に、忘れぬ彼の亡き母へのあいさつを託した。――

それから私は市街地を通して長い道のりをヘフト衛戍病院のある港湾地区まで行った。左にも右にも砲弾がうなりを立てて飛んできた。しかし、もはやいっさいが私には何の関係もないかのように思われた。主は、一時半のあいだ私が死にゆく息子のかたわらに座って別れを告げることをお許しくださったが、私はそのことで主に感謝した。このことを今もなおまったく特別な恩寵だと感じている。というのも、この頃は非常に多くの人々が、ここ青島でも、またフランスやロシアの戦場でも、ひっそりと血を流して死んでゆくが、彼らの額から誰も汗をぬぐうことなく、彼らの暗い道を穏やかな祈りの言葉で照らすこともないからである。

家にたどり着いたとき、敵の砲撃がひときわ激しく再開されていた。午前中のあいだに、町の総督が心のこもった手紙を送ってくれた。私をとりわけ喜ばせたのは、息子が最後に前哨に勤務し、彼の親しい戦友たちがいた歩兵堡壘から来た使いだった。歩兵堡壘を指揮していたS中尉の手紙を私に届けるためだけに、たえまない敵の砲火の真ただ中、自動車を走らせるのは勇気ある冒険だったにちがいない。その手紙は次のような文面である。「少年のように見えるあの華奢でのっぼの若い兵士が、困難な歩哨の任務にしばしば志願する並はずれて勇敢な戦士であると知りました。」

それから11月5日の晩9時に、私は息子を埋葬した。私たち参列者は

海辺に立って、彼が気に入っていた歌「わが魂よ、待つがよい」をうたった。海はどよめき、アルコナ海や軍艦の上陸部隊が陣地を占領していた島々から敵の砲火がきらめいていて、月は墓前の明るい蠟燭のように海と陸を照らしていた。「主よ、われらをどこに導くのですか。あなたは永遠の命の言葉を持っています」というのが歌詞だった。もはや棺もなかったが、戦友たちは死者を覆う白い布を花づなで飾ってくれていた。

かくてわが愛する子よ、神の手にやすらうがよい。黄海のほとりのあの地に。おまえは青島を愛し、おまえが生まれ、その言葉と風習になじんでいた中国に心から愛着を感じていた。個人的なことを言えば、おまえには未来に向けて大きな展望が開けていた。おまえはフライブルクで年季をつとめあげ、それから本店があるロンドンに行くつもりだった。おまえの目的地は遠い四川省で、そこは中国の18の省のうちで最も豊かだが最も未開の省のひとつである。おまえは青島の堡壘で斃（たお）れたが、そこには今、日の丸の旗が翻っている。おまえはいつも私の喜びであり楽しみであったが、おまえが東アジアの生活のもたらす厄介な誘惑に負けずにいられるだろうかということを、しばしば心配もした。――

私が食事中、怒りにまかせて大人になっていたおまえの横面を張ったのは、二年前のことではなかったか。「われらの血を分けた父たちも、彼らの意にしたがってわれらを懲らしめた」と、聖パウロはある箇所ですべているが、そのさい穏やかではあるがはっきりと、父たちの教育のあやまちに触れている。おまえは机から立ち上がり、私はそのあとで、そのような過誤を犯したという心苦しい気持ちでそこに座っていた。というのも、まともな父親ならば誰でも、子供を罰してもなお、その心をつなぎとめておきたいと願うからなのだ。それから、私の背後で静かにドアが開き、おまえはわたしの首のまわりに腕をかけてキスをし、また静かに出て行った。――けれども奇妙なのは、このような出来事を思い出したのが、座って自分の子供の光を失いつつある目を見ているときだったということだ。

しかし、聖パウロはコリント人への手紙二の第一章において、非常に美

しい言葉で次のように述べている。「神は、あらゆる苦難にさいして私たちを慰めてくださるので、私たちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。」¹ この一節の中には、まったき司牧神学がある。――

完

本日のコンサートの演奏曲目

- | | |
|--|----------|
| 1. オペラ『後宮からの誘拐』序曲 | モーツァルト |
| 2. 『ヴァイオリン弾きの郷愁』 ヴァイオリンと伴奏オーケストラ
のための協奏的レントラー | ケーゲル |
| 3. 『夢の国に来たれ』 | フリートマン |
| 4. 「灰色の軍服」
笑劇『号外』より兵士の歌 | W. コロー |
| 5. 『ホーエンフリートベルク行進曲』 | フリードリヒ二世 |

リゼル要塞の明け渡し

（この戦争における海軍砲兵隊のはたらきについての故国からのすべての報道に、われわれは特に大きな興味を感じている。それゆえわが読者たちは、公務建築師にして第二後備役火工下士ベアヴァルトが作った次の詩も喜んでくれるだろう。この作者は、リゼルの戦いで鉄十字章を授与された。）

1 コリント人への手紙 2, 1, 4。新共同訳による。



収容所の情景

その2

諸君、心楽しく兵士の口から
喜ばしい知らせを聞くがよい。

リゼルの堅き砦について。

砦はわれらが奇計により

一発も撃つことなく

海軍砲兵たちに門を開く。

10月の10日、

朱のような太陽は

朝早く軌道を進んだ。

エーリヒ・エドガー・シュルツェ

大尉が自動車で出かけていった。

大きな白旗を掲げて。

砦の前に着くと

彼はすぐに受け入れられた。

守将のジエヴェに。

「どうかすみやかに降伏を。

いとも巨大な砲が貴官の砦を
破壊してしまうから。」

こう言って去ったが、ジエヴェは
震えつつ苦い酒をもう一本を飲んだ。

(あとで瓶が見つかったのだ。)

それでも砦が粘ろうとするなら、
42センチ砲が轟音とともに
濠の縁を攻撃するだろう。

エーリヒ・エドガーはその間
憑かれたように車をとばし
アントワープの町まで行く。
そこで市長をつかまえて
車に放り込み、悪魔のように
迅速に砦に戻った。

すると市長はフラマン語で
守将と話をし、シュルツェは
意地悪く黙ってそばに立っていた。
ざまを見ろという気持からではなく
多くの兵隊たちと同様に
フラマン語がわからなかったからだ。

ジエヴェは困り果てて
われらのシュルツェに尋ねる。
「ああ、君が私ならいったいどうする。」
シュルツェは抜け目なくこう言って微笑む。
「降伏です。当然でしょう。
もちろん、できるだけはやく。」

論理に余儀なく追いつめられて
ジエヴェ殿は仕方がないと思う。
すばやく衆議は一決し、
日の光の中、城壁から
まもなく白旗がひるがえる。
だが、市長は泣いている。

旗が上がったのを見るやいなや、
海軍砲兵隊の兵たちは
うれしげに走り出した。
駆け足でそこへと急ぐのは、
敏捷で機敏で頑健な
よく知られた第五中隊だ。

見るがよい。砦の門から
三百人の砲手が出てきて
悲しい気持ちで虜となる。
その最後の足音が鳴りやむと
すぐにドイツの旗が翻る。
旗竿はベルギーのものだが。

これに誰よりも喜んだのは
あの第二次召集の海軍予備、
年の行った火工下士である。
それゆえこの詩を作ったのだ。
われらの黒白赤の国旗を
揚げたのは、彼だったので。

アントワープ 1914 年 10 月 16 日
メロディーは『高貴なる騎士オイゲン公』の曲で

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 31 問解答

1. Db5 - a6 Kd4-c5(xc3)

2. Sb6 - d5 詰み

他の変化も簡単

1. Db5 - c7+ Kd4 x e5(e3)

2. D か S で詰み

第 32 問解答

1. Kb2 - c2 Kc4 x b4 x

2. Sb1 - c3 任意の手

3. D で詰み

1. Kc4 - b5 +

2. Kc2 - b3 任意の手

3. D か S で詰み

1. Tc5 - d5

2. Sd1 - b2 + 任意の手

3. D で詰み

正解者は、J. ヴェーバー、H. ローデ

第 33 問

白：Kh3, Db2, Tb5, h5, Lf5, Sd4, h4, Be7, g7.

黒：Kf4, Df7, Ld2, b3, Sc3, e1, Be3, f[?]

2 手詰め

第 34 問

白：Kg7, Da4, Lf4, Bc5, e2

黒：Ke6, Lc4, Be7

3 手詰め

ワルシャワ陥落

「8月5日朝、ドイツ軍はワルシャワを占領した」と、ドイツ側の公式発表がなされた。かくも簡素に何の付け足しもなく、この戦争が今日まで記してきた最大の成果のひとつについての知らせがやってきた。

「ワルシャワ陥落。」英雄的勇気が、勇敢な自己犠牲が、共通の偉大な関心事への無私の献身が、偉大な目標をめざす、極限まで遂行された義務の意識が、どれほどこの二つの簡素な言葉に込められていることか。

ポーランド王国の古い首都ワルシャワ、その占領のために他の町より多くの血が流されたかもしれないが、この町は今、われわれの手中にある。それは、おそらく世界の歴史がほとんど記したことのないような、超人的に困難で出血を強いる戦いがあってのことだったろう。というのも、今日こう考えてもよいと思うのだが、ガリツィアにおける幾度かの大きな戦闘は、ポーランドのワルシャワ征服の序章にすぎなかったからである。ワルシャワを前にして、あるときは幾分その近くで、あるときはやや離れてではあるが、ほとんど戦争開始の時からずっと戦いがおこなわれてきた。

ワルシャワ占領がどれほど重要であるか、またおそらくそれとほぼ同じ意味ではあるが、ヴァイクセル〔ヴィスワ〕川の制圧がどれほど重要であるかということは、次の事実によって最も明らかになる。ロシア軍は、戦争の全期間にわたってここに最上の部隊を配置し、寸土をめぐってでも他ではめったに見られないような頑強さで防衛をおこなった。しかし、ドイツの戦略とドイツ的勇敢さが、ここで何カ月もの戦いののち、これまでほとんど記されたことのないような勝利を収めたのである。

これは歴史の中で、「ワルシャワの戦い」と呼ばれることはないだろう。ワルシャワ陥落は一連の戦闘の中の出来事であり、ホルム、ルブリン、イヴァンゴロド、ラドム、ロツジュ、ロヴィツチュ、プロツク、プラシュヴィッツ、プトウルスク、オストランレンカ、さらにはまたポーランドの野でドイツの英雄の血がしみこんださまざまな名の戦場でわれわれの勝利に対

する賞である。

ワルシャワの陥落とそれに続く数週間の期待される結果は、考え抜かれ、傑出し、賞賛すべき仕方です行された作戦計画の成果である。この作戦計画を、全世界は、われわれに敵対している国々でさえ、驚きをもって見るであろう。

「ワルシャワ陥落

万歳、万歳、万歳」

「エムデン」上陸隊体験記（5）

四匹の子羊が屠殺され、火で焼かれている。男たちは子供のようにふざけながら水浴びをし、砂漠から特別列車の客車の方をうれしそうに見る。しかし、皆の額には幾多の冒険が刻まれており、それは「ドイツのために」と銘打たれた冒険である。

「エムデン」隊の砂漠越え

フォン・ミュッケと彼の部下の三人の少尉、ゲールツ、ヴェルマン、ギュスリングの談話による。（『ベルリン日刊新聞』より引用）

ダマスカス、5月11日

それ以降の体験について、フォン・ミュッケ大尉は次のように語った。「ホデイダへの到着の二ヵ月後、われわれは再び海に出た。サナの高地での時間は、長々とした偵察と相談で過ぎたが、その結果、宗教的な理由により、アラビアを通っての陸路の旅はあきらめることにした。しかし、この時間がまったく無駄だったわけではない。マラリア患者たちは、高地の空気の中でほとんど回復していたからである。

トルコ政府は約 25 トンで 15 メートルの長さ、4 メートル幅の二艘のザ

ンブク（帆船）を提供してくれた。しかし、われわれはイギリスのスパイを恐れて、ホデイダ北方 10 マイルの、イエバナ付近から海に乗り出した。3 月 14 日のことだった。最初われわれの二艘は大きく距離をとって航海していた。イギリスの砲艦に捕まるとしても、いちどきに両方やられないためである。そんなわけで、いつも沿岸海域を航行しなければならなかったが、そこはサンゴ礁だらけなのだ。」

「隊長は」と、ゲールツ少尉は語る。「一艘目のザンブクの指揮をとり、私は二艘目の指揮をとった。これは一艘目よりも大きかったが、4 人の病人を抱えていたからだ。はじめの三日間はうまくいった。一艘目の帆は、たいていまだ前方に見えていた。三日目に、もっと追いついて一艘目の近くを航行するようにと命令を受けたが、それは一艘目の水先案内人がわれわれのよりもよくないためである。薄闇の中で突然私は衝撃を感じ、さらに一回、また一回と続いた。水がすぐに入ってくる。小さな島の暗礁に乗り上げてしまったのだ。そこを小さな方のザンブクはかろうじてすり抜けることができたわけだが、それは 1 フィートほど喫水が浅かったからだ。こちらの船はすぐに水でいっぱいになり、傾いたので、われわれは 28 人全員が持ち上がった方の船端に上らねばならなかった。この小島はイエジラート・マルカのそばにあり、イエバウアの北 200 マイルのところだった。近くにアラビア人のボートがあったかもしれないが、彼らはわれわれのことを知らなかったので、誰もわれわれを助けることができなかった。隊長が数時間前に命令を変更して接近を命じていなかったとしたら、われわれは多分サンゴ礁の島で溺死していたか、そうでなくても渴きで死んでいただろう。さらにそこにはサメがうようよいたし、夕方はとても荒れて、傾いたわれわれのボートは波が来るたびに持ち上がっては岩にぶつかった。」

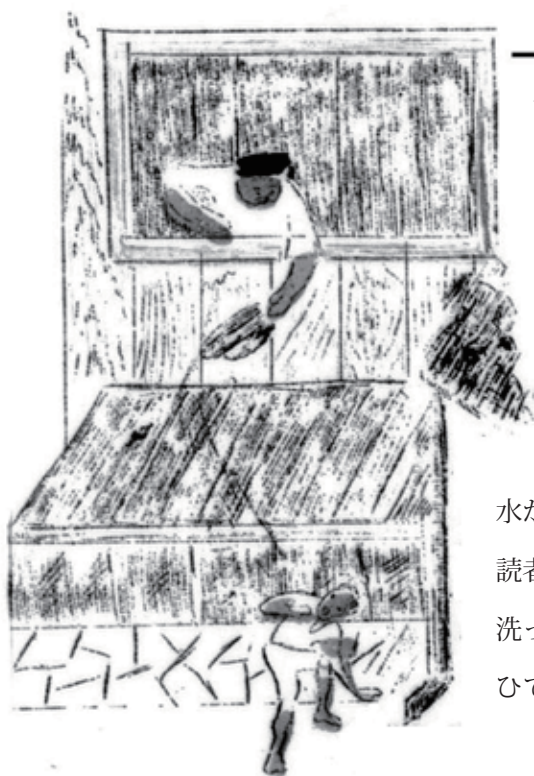
つづく



シュピーゲル（鏡）

「トクシマ・アンツアイ
ガー」19号ユーモア
付録

1915年8月8日



銘記せよ

便利には違いないが
お前にだけで、俺じゃない。
おれが最近くったことは
うれしいことではなかった。
あんな水しぶきが上から
大事な頭にかかってくる
なんて。

水がまだきれいだったら、
読者よ、それでいいのだが、
洗った後の臭い石鹸水だったら
ひでえ、と言うにちがいない。



防衛と歩哨のためここにいる
哨兵たち、彼らのことを教えよう。
毎日、ラッパの音とともに
こうして4時頃彼らはやってくる。
これが、いつものことだが今日も
交代を終える者たちに嬉しいこと。

時間が終わって、楽しくて
帰還行進もうすぐはじまる。



哨 所 で

一時間ごとに新しい哨兵が
さっさと歩いてやってくる。
二人は門に、一人は隅に立つ。
四人目は生垣沿いに歩いているが、
不愉快なことに、無為な見物人を、
壁から追い立てねばならない。
それで、ポンプでシャワーする者に
哨兵は怒りをぶちまけ、ののしる。
シャワーには洗い場があるじゃないかと。
だけど、こっちの方が気持ちいいからね。



ときは流れ、時間が過ぎてゆく。
やがて晩が近づき、一気に暗くなり
床に着く者らは 10 時に寝る。
おれの方が寝たい、と哨兵は思う。
こんな考えにふけっていると、
突然ならず者らにぎよっとする。

